登録室ご紹介

Yamagata
がん患者登録センター
山形大学医学部附属病院

「蔵王の樹氷」

生産量日本一
「さくらんぼ」

山形で、「ととのう」

昨今のサウナブームで、「ととのう」という言葉を耳にする機会が増えました。サウナ、水風呂、休憩を繰り返すことにより、心身ともに整ったこと＝「ととのう」というのだそうです。

山形大学医学部附属病院がある山形県山形市は東北地方にあり、冬は1月の平均気温が-0.1℃、2月の平均最深積雪が47cmほどになりますが、夏には最高気温40.8℃（1933年7月25日）を記録したことがあります。この気温は、2007年に塗り替えられるまで74年間もの間、日本の最高気温の記録でした。まさに、夏→冬の季節の移り変わりが、サウナ→水風呂のようなものであり、1年を通して自然と心身が「ととのう」ことができる、そんな場所です。

がん患者登録センターについて

山形大学医学部附属病院は、組織をあげてがんに対応することを目的として、2005年に国立大学においてはじめて「がんセンター」が創設されました。がんセンター内には臨床部門を担当する組織として、「がん臨床センター」があり、がん臨床センター内には院内がん登録を担当する「がん患者登録センター」が構成されました。センターの統括責任者は公衆衛生学講座教授が務めています。登録実務については、専従の中級認定者2名が年間約2,200件の登録をおこなっています。2006年8月には、厚生労働大臣により地域がん診療連携拠点病院に指定され、専門的ながん医療の提供、地域のがん診療の連携協力体制の構築、がん患者さんに対する相談支援及び情報提供等を行っています。がん診療の質の向上のため、院内がん登録データとDPCデータを用いたQI（診療の質評価指標）研究や、院内がん登録 3年・5年・10年生存率集計のための登録予後調査支援事業に参加し、他施設間での生存率や一定の標準診療実施率などを比較検討しています。その他にも院内がん登録の情報は、小児がん連携病院の現況報告書やQIデータ算出にあたってのベースデータ、眼科J-COTSなど、多岐に渡り活用されています。↗

↘2021年2月25日、山形大学医学部東日本重粒子センターで重粒子（炭素イオン線）による治療を開始しました。重粒子線治療は放射線治療の一つで、粒子線治療に分類されます。東北・北海道には粒子線治療施設が4施設ありますが、いずれも陽子線による治療施設であり、重粒子線による治療は東北・北海道地区では東日本重粒子センターが初めてとなります。がん患者登録センターにおいては、様々な要因により重粒子線治療の開始が起算日から5か月を過ぎた症例についても、将来的なデータ分析を見据え、放射線治療開始日を登録しています。

コロナ禍における勤務体制について

院内がん登録の主な業務内容としては、カルテ情報から必要事項を見つけ出し、データベースに入力することです。コロナ禍においてテレワークが推進されましたが、本業務をテレワークにておこなうことは不可能です。しかしながら、当センターにおいては実務の業務時間と病院の外来稼働時間を必ずしも一致させる必要がないため、大学で導入している勤務時間変更を利用しています。事前に申請すれば、業務の開始時間を日毎に7:30～10:00まで30分単位で選択することが可能です。早朝のまだ誰も出勤しておらず、電話も来ない状況は、まるで憧れのテレワークのようです。